

# 農 林 水 産 大 臣 賞

## 1. 地区概要

参加団体名：金田北部土地改良区（栃木県）

表彰地区名：金田北部2期地区

事業名等：経営体育成基盤整備事業（旧ほ場整備事業担い手育成型 H11～H18）

主要工事：整地工、水路工、道路工、揚水機、暗渠排水

## 2. 推薦理由

金田北部2期地区は、水田稲作を中心とした田園地帯で、早くから豊富な地下水を利用した農業が盛んな地域でしたが、田区は不整形地で狭いうえ、耕作道路や用排水路の未整備により作業効率の面、集出荷の荷傷みの面など苦慮している地域だった。さらに、作物によっては、耕作不能な土地もあり付加価値の高い作物の栽培等に苦慮していた地域でもあった。

そこで本地区では、早いうちから土地改良事業の導入について話し合いがなされたが諸問題の解決に時間を要し、実現に至らずにいた。

しかし、地域の若い担い手を中心となり積極的に事業推進した結果、地元意識が高まるとともに、平成11年に県営事業として知事の決定を受け工事に着工し、平成19年に事業が完了した。事業にあたっては、区画を5,000㎡以上の大区画を標準とし、作業効率の向上は勿論のこと、担い手の確保育成と農地集積に務め、事業完了時の担い手への農地集積率は整備前の2倍以上と大幅な増加となった。（整備前21.7%→整備後47.0%）

また、水稻、麦、大豆の土地利用型農業の推進と共に、首都圏に近い立地条件を生かした園芸作物であるウド、ニラ、ねぎ、なすなどの付加価値の高い作物の栽培も推進し、現在では、作物の連坦化に向けた働きかけを積極的に進め、さらなる効率化や省力化に努力している地域である。

平成19年4月からは、当土地改良区が主軸となり、「金田北部地域環境保全会」を立上げ、地域と連携し「農地・水・環境保全向上対策事業」による農業農村環境の保全（地区内の湧水池の保全）に努めるなど、地域の先導的役割を担っている。

## 3. 受益地区における農家及び担い手の状況

### （1）受益地区における農家数の状況

区 分	事業実施前	現 在
総農家数	99戸（9戸）	107戸（8戸）
うち専業農家数	13戸（9戸）	13戸（8戸）
うち兼業農家数	86戸（0戸）	94戸（0戸）
認定農業者	6人	8人
生産組織等（法人含む）	1組織	1組織

※（ ）内の戸数は、担い手農家数

(2) 農用地の流動化状況

項目	事業実施前	現在	目標
受益面積	146.2 ha	131.1 ha	
担い手等の利用集積面積	31.7 ha	61.1 ha	68.9 ha
①利用権設定面積	4.0 ha	0.7 ha	2.0 ha
②受託面積	0.0 ha	31.1 ha	25.1 ha

4. 事業地区内の農業経営状況

区分 作物名	事業実施前 (10a 当たり)			現在 (10a 当たり)		
	労働時間	反 収	生産費	労働時間	反 収	生産費
水 稻	56.1 hr	563 kg	71 千円	20.6 hr	574 kg	60 千円
大 豆	30.3	—	31	9.9	268	25
二条大麦	30.3	422	33	9.9	422	28
ね ぎ	103.9	—	300	76.3	2,574	271
な す	437.3	—	820	363.1	5,578	806

区分 作物名	作付面積の推移		
	事業実施前	現在	目標
水 稻	133.6 ha	82.7 ha	92.0 ha
大 豆	— ha	19.6 ha	25.9 ha
二条大麦	13.1 ha	12.0 ha	17.4 ha
ね ぎ	— ha	2.0 ha	5.0 ha
な す	0.7 ha	0.7 ha	2.2 ha
う ど	— ha	7.6 ha	— ha
ニ ラ	0.9 ha	1.3 ha	2.4 ha
キュウリ	— ha	— ha	1.0 ha
キャベツ	— ha	0.9 ha	— ha
白 菜	0.7 ha	— ha	0.7 ha
飼料作物	— ha	18.0 ha	— ha
牧 草	— ha	13.7 ha	— ha
花 卉	— ha	1.3 ha	— ha
その他の野菜	— ha	— ha	2.6 ha
合 計	149.0 ha	159.8 ha	149.2 ha
土地利用率	110.2 %	121.9 %	113.4 %

## 5. 営農推進の状況

### (1) 栽培技術関係

土地改良事業により大区画の圃場が完成したことから、大型機械の導入が進み作業の効率化や省力化が図られ、余剰労力で付加価値の高い作物の栽培にとりくむ農家も増加するなど、収益性の高い農業を展開することができた。

また、担い手への農地集積が図られたことにより、作業の効率化が図れたことは勿論のこと、防除作業等の統一化により、他作物への影響を最小限に抑えることが可能となるなど環境面でも大きな効果が望めた。

さらには畜産農家とのタイアップにより堆肥の農地還元による「土づくり」を進めるなど、安心安全な作物の栽培にも取り組んでいる。

### (2) 転作関係の状況

#### ①整備後の転作の状況（現況）

・転作面積 52.3 ha（事業実施前の転作面積 54.1 ha）

#### ②転作作物名と作付面積

麦（12.0ha）、大豆（19.6ha）、デントコーン等（18.0ha）、うど（7.6ha）、ニラ（1.3ha）  
なす（0.7ha）、花卉（1.3ha）、牧草（13.7ha）、ねぎ（2.0ha）、キャベツ（0.9ha）

#### ③新規作物の導入状況

大豆（19.6ha）、ねぎ（2.0ha）、うど（7.6ha）、キャベツ（0.9ha）、デントコーン（18.0ha）  
牧草（13.7ha）、花卉（1.3ha）

#### ④転作や新規作物の導入に当たって、特にPRすること

事業実施前には連作障害の起きやすい作物が導入できなかったが、実施後には大豆、うど、なすなどの作付けが可能となり、転作効果を上げているほか、担い手への農地集積や作物の連坦化により、より計画的な転作が可能となった。

また、事業を契機に「那須の白美人ネギ（なすのはくびじんねぎ）」、「那須の春香ウド（なすのはるかうど）」、「美ーなす（びーなす）」などの那須ブランド野菜への取り組みも積極的に進められている。

### (3) 農産物の加工、流通、販売などに向けた取り組み

当地区で生産された米については、「なすそだち」のブランド名で農協が出荷しているほか、ねぎ、うど、なすがそれぞれ、那須ブランド野菜として広く流通し、販売されている。

また、大田原市が設置した「道の駅那須与一の郷」での米や野菜等の直売などにも出荷されるほか、地産地消の観点から小中学校の給食等にも利用されています。

## 6. 環境に配慮した取り組み

事業の実施にあたっては、地域住民の要望により、生態系に配慮した用排水路の使用を積極的に進めるなど、農村のまちづくりの原点に立ち、地域住民の意向を最重点に考え、環境に配慮した整備を実施している。

また、「金田北部地域環境保全会」を当み水土里ネットが中心となって立ち上げ「農地・水・環境保全向上対策事業」に取り組むなど、農業者のみならず地域住民がこぞって、当地域の環境保全はもとより、今後の農業農村の在り方を模索し、活性化された地域を目指して活動している。

今後は、当地区内の湧水池を保護し、生態系に配慮した整備を図るため、約30aの「池の御前」及び「おかんじち川」を、地域のシンボルとして環境に配慮した整備を計画している。特に、地元の小学生による生態系調査や観察会を実施し、今後も継続的に実施することとなっている。

## 7. その他事業実施の効果による新たな取り組み

### (1) 余剰労働力の活用方法

うど、にら、ねぎ、なす、花卉などの付加価値の高い作物の栽培には、多くの労働力が必要となるため、栽培面積が増加するに従い、余剰労働力の活用や年間を通した雇用の創出が図られている。

### (2) 新たな雇用の場の創出

付加価値の高い作物には、補助作業員等の雇用が不可欠となり、営農合理化による余剰労働力（主婦やお年寄り等）や市シルバー人材センターの活用など、雇用の創出の場が増えている。

## 8. 行政や関係者が「事業計画、施工、利活用など」において苦労した点

当地域は、早い時期から今後の地域農業の発展のためには事業実施が必要だとの認識にたち、圃場整備研究会や協議会等も設立されて検討が進められていたが、なかなか実現に至らなかった。しかし、地元推進委員や地域の農業者が粘り強く事業の必要性を訴え平成11年に念願の事業採択に至ったが、その後も整備計画の変更や事業未同意者の調整などに苦慮し、完成まで8年間の歳月を費やした。

事業計画当初は、受益者から米価等の低落から事業負担金や施設の維持管理費の負担に不安感を抱いているとの意見が多く出たが、関係機関との協議の結果、農協用地、河川用地、市道用地などを事業で創設することによって、地元負担金の軽減を図ることができた。

事業実施中には、担い手への農地集積や作物の連坦化を進めることに多くの時間を要すとともに事業実施に伴う苦情処理にも苦慮した。

生態系への配慮については、理解されない部分も多かったが、農業農村のあるべき姿を話し合った結果、生態系へ配慮した施設などを設置することができた。

事業完了後には、地域環境保全会が立上がり、地域住民との交流も盛んとなり、住民同志のコミュニケーションも図られるなど、希薄となりがちな農村の連帯意識の改善が図られている。

当水土里ネットが中心となって、副理事長が上記保全会の会長を務めるなど、地域の環境等に対する先進的な考えを持っており、事業を契機に今後益々地域住民との交流や施策展開が推進されることとなることを大いに期待している。

## 9. 周辺地域への波及効果及び将来の展望

水稻を中心とした地域から、事業の完了に伴い、麦、大豆及び付加価値の高い園芸作物等の栽培が可能となり、今まで栽培が出来なかった作物等が栽培されるなど農業の形態が変化しつつある。

例えば、水稻、麦、大豆を主体とした土地利用型農業のほか、農地の汎用化が図られたことにより、飼料作物等の栽培も大幅に伸び地区農家の畜産振興に寄与しているとともに「那須の白美人ネギ」、「那須の春香ウド」、「美一なす」などブランド野菜の取り組みが推進され、栽培面積も徐々に拡大しつつある。また、本事業の整備によって地域ぐるみの活動組織が誕生し、農業者のみではなく、今までなかった非農家を巻き込んだ地域一体となった活動が展開されたことにより、地域の連帯感の形成や農村環境保全への理解と協力の促進など、地域の活性化にも大きく貢献している。

なお、この地区の成功を契機に周辺地域の事業に対する認識も高まり、金田北部3期地区が、平成20年度から事業に着手するなど、事業の推進にも大きく貢献している。

さらに、当地域のシンボルとして、保存された巨木の「練貫のエノキ（ねりぬきのえのき）」については、事業の完成を契機に地元の保存会が、周辺の植栽や草刈り等を実施し、樹木の状況を観察するなど、地域住民の環境に対する意識の醸成が図られつつあり、近隣への波及効果は大きなものがある。

昨今の農業を取り巻く環境は、農業人口の減少・高齢化、農業離れなど厳しいものがあるが、事業を契機に地域の農業農村を守り育てるための意識が大きく醸成され、農地の有効利用のために担い手への農地集積等が進むものと思われる。また、農業農村の環境整備については、現在の活動が更に進化し、様々な取り組みが更に充実し、継続して行くことが必要であり、農業者は勿論のこと地域住民が一体となって環境整備を図る必要がある。



金田北部土地改良区 2期地区全景



地域の環境を話し合う会合



吉際生産組合のライスセンター



大型機械の導入



生態系に考慮した用水路





「那須の白美人ネギ」の圃場



大豆の圃場



デントコーンの圃場



ニラのハウス



多自然型の排水路での生態系調査



地区の環境を守る水路の清掃



地域のシンボル「池の御前」の清掃状況



農道整備